

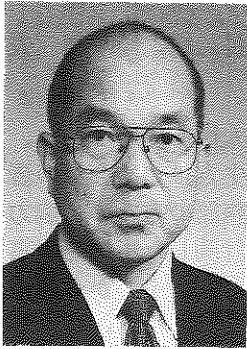
栃木県中学校長会報

〔役員所感〕

平成16年9月10日 発行 第101号
栃木県中学校長会広報部

日ごろの取り組みに誇りを

見えますか、子どものサイン？



栃木県中学校長会長
宇都宮市旭中学校
校長 小林 幸 正

〔生きる力〕 育成をめざした新教育課程は、実施3年目を迎えました。各学校は、目標に準拠した指導と評価の定着や授業内容の改善、総合的な学習の時間の充実等に留意

しながら取り組んでいます。いまは、これまでの実践を振り返り、成果や課題を明らかにすべき段階だと思います。

さて、いま政府は、行財改革に伴う義務教育費国庫負担制度の見直しを進めようとしています。これは、財政論を優先し教育論を軽視するような、義務教育の根幹を揺るがす重大な問題であり、本会としても制度堅持を強く訴えるものです。

ところで、昨年度実施した全日中教育研究部のアンケート調査で、公立中学校の4割が外部評価制度を導入し、4割が導入を検討している、との報告がありました。

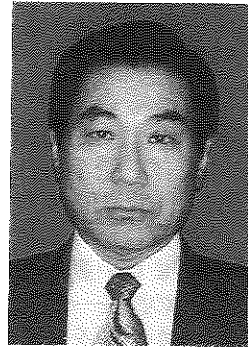
導入校での評価者は、学校評議員、PTA役員の他に保護者や生徒が含まれることも多く、人選のしかたに議論の余地はあるものの、開かれた学校実現に向けた動きは、一層加速されると思います。

このように改革の渦中にある学校現場に、各地で小中学校の事件が報じられ、なかには、自らが人命にかかわる加害者である場合もあり、事態の深刻さ、そして、本人や関係者のこれからや学校経営者としての諸対応等を考えるとき、我々の悩みは深まるばかりです。

また、こうした事件があると、ことさら学校教育にその背景や要因を見出そうとするような傾向が感じられ、現代社会の顕著な風潮のひとつであるように思います。

そうしたなか、学校現場は、児童生徒の〔生きる力〕の基盤づくりのため、毎日奮闘しています。その営みは、地道な繰り返しそのものであり、パフォーマンスまがいの一過性のものではありません。足元をしっかりと見つけた堅実で継続的な取り組みこそ、学校教育の本質であり「不易」なものであるはずです。

学校教育が生徒や保護者はもとより地域の方々からの信頼に応えるには、そうした日々の営みに誇りを持ち、全力で取り組んでいくことに尽きる、そのことを、私たちは教職員に繰り返し語ってきたいものです。



栃木県中学校長会副会長
宇都宮市立陽西中学校
校長 高橋 勝 也

児童生徒による痛ましい事件が報道されるたびに、「命の大切さや心の教育」が取りざたされます。

長崎県佐世保市女子児童殺害事件を受けて、河村文部科

学大臣は「人を傷つけてはいけない、暴力をふるってはいけない、命は大切であることを教えることは教育の原点である」と、コメントしています。言葉で言いきることは簡単ですが、うまく教えることができれば、こんなことは起こらないともあります。学力を向上させるよりもはるかに難しい教育課題ですが、この難題から逃げることなく、真っ向から真摯に取り組まねばならないのも教育の宿命です。

どの学校でも、教育活動全般を通じて、「命の大切さ」について指導の徹底が図られ、心のケアなどの取組がすすめられています。子どもたちの心の荒廃が憂慮される中、学校の取組や対応をさらに充実していくことは緊急の課題です。しかし、学校行事や対外試合等の連続で、忙しいことを理由に、子どもたち一人一人の心の変化を把握できなかったといわれないようにするのも教師の努めです。

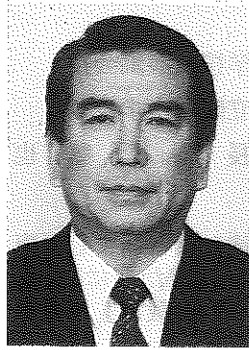
不安や悩みを持っている子どもほど、様々なサインを発するものです。そのサインに気づき、適切な対応を行うために、子どもの心を深く理解しなければならないといわれてきました。といっても、簡単に子どもの心が分かる方法なんてありません。ただ「この程度」と軽くみて、そのままにしておいては取り返しがつかなくなるくらいは知っています。よほどの忍耐力と経験に裏打ちされて見る目と重大な関心をもって見つめる姿勢を持たない限り、そう簡単に分かるものではないということでしょうか。

学校は、本来、安全で楽しい場であるはずですが、したがって、学校の安全に対する信頼が揺らぐことだけは何がなんでも避けなければなりません。信頼こそ教育の一大原則ですから、全教師が肝に銘じていなければならない典型的な不易の側面だといえます。改革の流れが加速している今こそ、時代を越えて変わらない教育における不易を問いつける教師でありたいと思っています。

「教え込む」学校から、触れ合いに満ち、教師と子どもが原体験を共有できる、安心で楽しい、そんな学校づくりをしたいものです。

〔役員所感〕

自らに「問い」を



栃木県中学校長会副会長
宇都宮市立陽北中学校
校長 新 沼 隆 三

炎天のグラウンド、酷暑の体育館等での総体。選手のひたむきな姿とともに、指導者の熱い思いや勝負にかける執念、労力を惜しまない勤勉さ等に感謝と敬意の念を一層強くする中、極めて稀なケースとは思いますが、眉をひそめたくなくなるような場面にも直面した。叱咤・激励とは到底思えないような罵詈雑言（私にはそう思えた）を子供たちに浴びせる指導者の姿である。心血を注いだ子供たちが、成果を出せないまま意気消沈している姿への憤りは分かるが、罵倒するだけのその姿はいかにも見苦しく、指導力以前の問題、端的に言えば、大人になりきっていないのではないかという思いがしてならなかった。

精神科医町田静夫氏は、著書「大人になれないこの国の子供たち」の中で、自己の内面や感情をコントロールできること、他人への理解や共感、他人を配慮する優しさなど、四点を大人の条件である「心の成熟」として上げているが、自立の遅れや心の未成熟が大人社会にも見られるようになってきたことは、近年の新聞報道等でも明らかである。

こうした状況は、残念ながら学校社会とも無縁ではありえず、自己の内面や感情をうまくコントロールできない、他人への理解や共感がうまくできないなどから、感情的な言動で相手の心を傷つけたり、事あるごとに相手との感情的対立を招き、しかも自力では解決できないといった例が少なからず発生していきっていると認識している。

一方、長期にわたる景気の低迷等を背景に、県民総雇用者意識は加速度的に高まり、人権意識の希薄な者や心の発達が未成熟な者は、とことん糾弾し、追放すべしといった風潮が拡大しつつある。

こうした状況下、校長に求められるのは、結果責任であり、適切に指導したということのみでは、免罪符とならない時代に入っている。それゆえ、学校経営の最高責任者として、常に自らに「問い」を待たなくてはならないと自戒する日々である。

—「平凡な（校長）はただしゃべる。優れた（校長）はよく理解させようとする。もっといい（校長）は、やってみせる。最高の（校長）は、（職員）の心に火をつける」—（ウィリアム・アーサー・ワード：括弧内はアレンジ）

〔退任に当たって〕



前栃木県中学校長会長
前宇都宮市立陽北中学校
校長 柿 崎 龍 夫

会長の大役を仰せつかり、役員の方々はじめ会員の皆様方、事務局の方々のご協力により、計画した事業を無事終了できたことを心から感謝申し上げます。

2学期制や学校の外部評価、教職員の評価をはじめ、特別支援教育、学区の自由化など、教育改革の波は否応なしに学校現場に押し寄せ、各学校では、その一つ一つについてじっくりと検証する間もなく次々と新たなことに取り組まなくてはならない苦労を味わったのではないかと思います。

そのような中、義務教育費国庫負担制度の堅持の問題は教育界全体を揺るがすこととなり、全日中では組織をあげて各方面への要望活動等に力を注ぎ、本県校長会でも役員を中心に地区校長会一体となって、県知事、県議会議長をはじめ、関係各方面に働きかけを行った1年間でした。それらの活動が功を奏し、現在、文科省が打ち出した総額裁量制が検討されているところです。

また、35人学級については財政厳しき折りにもかかわらず、県当局の英断で実現することができ、今後拡大の方向で検討するということですので、校長会としてもしっかりと見守り、行政への働きかけを継続していく必要があります。

ところで、今、課題が山積している中、校長としてやらなければならない最も重要なことは、教職員の資質・能力の向上を図ることであると思います。

かつては、いわゆる教育の職人ともいべき教師がどこの学校にもいたような気がします。

精密機械の部品の研磨も、最後は職人の磨かれた技と経験からくる勘に頼るといいます。一つのことには情熱を傾け、自分の仕事に誇りを持てる職人教師の育成こそが、今、最も求められているのではないのでしょうか。

最後になりましたが、会員の皆様のみならずご活躍と本会の一層の発展を祈念して退任のあいさつといたします。

〔関ブロ・埼玉大会の報告〕

事務局長 犬塚 恒 士（宇・泉が丘中）
第56回関東甲信越地区中学校長会研究協議会埼玉大会は、「豊かな未来社会を創るたくましい日本人を育てる中学校教育」を研究主題とし、6月17日（休）・18日（金）に埼玉県さいたま市を会場に開催された。なお、これに先立ち、6月16日（休）に理事会及び総会が開催された。

以下、研究協議会の概要である。

- 1 日 程
 - 6/17 ・開会式 ・文部科学省説明 ・全体協議会 ・分科会
 - 6/18 ・全体会 ・記念講演 ・開会式

2 概 要

(1) 文部科学省説明
「当面する初等中等教育上の諸問題について」と題し、初等中等教育局教育課程課長の大槻達也氏が国の動きを踏まえて現状及び今後の教育改革の方向等々について資料等を用いて説明をされた。

(2) 全体協議会
全体協議会では、埼玉県より研究主題に迫る「確かな学力の育成・定着」そして「心の教育の充実」を視点においたさいたま市中学校長会の取り組みを中心とした提案がなされた。

(3) 分科会
8分科会に分かれ、研究主題にせまる提案・質疑が展開された。

特に、第7分科会（条件整備）「個性を育む特色ある学校づくり」では、本県より綱川浄校長（南河内中）が提案者として登壇し、本県特に河内郡の取り組みについて具体的に発表・提案していただきました。また、戸倉文夫校長（本郷中）にも司会者として尽力をいただいた。

(4) 記念講演
演題を「21世紀の子供たちのために」と題して、埼玉県出身の音楽家、タケカワユキヒデ氏が熱く語りました。タケカワ氏は、「ガンダーラ」「銀河鉄道999」など多くの人々に親しまれる数多くのヒット曲を持つ作曲家・歌手。現在、音楽家のほか、テレビや執筆活動などでも活躍中の方です。多忙の中、約90分の貴重な講演をいただいた。

〔専門部の活動計画〕

◆ 総 務 部
部長 金子 政 司（宇・清原中）
平成16年4月20日、県教育会館において第1回総務部会を開催し、役員選出並びに年間行事内容・計画について協議を行った。

- 1 平成16年度役員
 - 部長 金子 政 司（宇・清原中）
 - 副部長 戸 倉 文 夫（河・本郷中）
 - “ 高 瀬 崇 夫（塩・矢板中）
- 2 事業内容
 - (1) 県中学校校長会要望書案の策定
 - (2) 行政当局をはじめ県内各関係機関への要望活動の推進
 - (3) 県中学校長会の次年度の運営方針、活動の重点の検討と立案
- 3 事業計画
 - (1) 義務教育振興協議会要望書起草委員会への意見集約
 - (2) 第2回総務部会（7月8日）～県中学校長会要望書案の策定
 - (3) 県教委事務局等への要望活動
 - (4) 知事部局、県議会関係者への要望活動
 - (5) 各地区の関係機関への要望活動
 - (6) 第3回総務部会（9月16日）～平成17年度の運営方針・活動の重点等案の策定
 - (7) 第4回総務部会（1月）～平成17年度の運営方針・活動の重点等案の決定
 - (8) 理事・協議員会に平成17年の運営方針・活動の重点等提案

◆ 調 査 部
部長 佐藤 哲 夫（宇・横川中）
調査部では、4月の部会において今年度の組織及び事業計画を次のように決定した。

- 1 役 員
 - 部長 佐藤 哲 夫（宇・横川 中）
 - 副部長 江 面 一 雄（河・古里 中）
 - “ 阿 部 茂（安・田沼西中）
- 2 事業計画
 - (1) 全日中教育情報部が全国で実施する「中学校教育に関する調査」に応じ、本県の状況を調査し報告する。
 - (2) 各学校で関心の高い教育課題について全県的

に調査し資料を提供する。

- (3) 他県、各教育機関・団体との連携・協力並びに資料・情報の交換・提供等を行う。

3 実施状況

- (1) 「中学校教育に関する調査」について
全日本中学校長会教育情報部の要請に基づき、県教委の協力をいただき回答を作成し報告した。調査結果をまとめた調査資料(冊子)は、全会員に配布される。
- (2) 「教育課題の調査」について
各地区の教育課題の取り組み状況等について提案されたが検討不足のため、継続課題とする。
- (3) 情報提供等について
関東甲信越地区校長会の要請に基づき、情報交換資料を作成し報告した。

◆ 研修部

部長 山市 隆(宇・一条中)

1 平成16年度役員

部長 山市 隆(宇・一条中)
副部長 上野 武(塩・船生中)
〃 堀江 真樹(南・馬頭中)

2 平成16年度活動計画

(1) 研究テーマ

主 題 豊かな未来社会を創るたくましい日本人を育てる中学校教育
副主題 生徒一人一人を生かした特色ある教育活動の推進

(2) 活動内容

- ア 第26回栃木県中学校長会研究大会の開催
○期日 平成16年9月10日(金)
○会場 栃木県子ども総合科学館
○内容
・開会行事
・全体会(宇河地区、芳賀地区、安足地区による研究発表)
・分科会協議(3分科会に分かれた研究協議)
・講演(高階玲治氏(ベネッセ未来教育センター所長)による講演「組織の活性化を図る教員の評価について」)

イ 研究集録の作成と発行

- 第26回研究大会の概要
○各地区の研究概要

ウ 研究課題の検討

- 次年度の研究テーマの検討・策定

◆ 事業部

部長 神長 利光(宇・宝木中)

平成16年4月20日(火)、教育会館において事業部会を開き、前年度までの事業の継承の必要性を確認し、本年度の組織及び事業計画を次のように決定した。

1 役員

部長 神長 利光(宇・宝木中)
副部長 鈴木 希一(河・上河内中)
〃 大嶋 丘(塩・北高根沢中)

2 事業計画

研修会の開催「退職後の生活設計について」

- (1) 日時 平成16年12月3日(金)
13:00~16:00
(2) 会場 栃木県教育会館 3階大会議室
(3) 参加者 栃木県中学校長会会員(希望者)
(4) 内容

ア あいさつ

- ・栃木県中学校長会会長
- ・栃木県教育委員会健康福利課長

イ 講話

講師(予定)
栃木県教育委員会健康福利課 担当職員

(ア) 医療保険について

- ・退職後の医療について
- ・任意継続組合員制度について
- ・継続医療制度について

(イ) 退職手当について

- ・退職手当について
- ・退職手当の算出について
- ・各種の税について
- (ウ) 年金制度について
- ・退職共済年金の内容と仕組みについて
- ・退職共済年金の支給について

(エ) 教育福祉振興退職者部会について

- ・退職者部会について
- ・退職者部会の加入の仕方について

(オ) その他

ウ 質疑応答

◆ 広報部

部長 飯塚 雅廣(河・第二中)

平成16年4月20日(火)に、下記のように新役員を決定し、次いで平成16年6月21日(月)教育会館にて第2回広報部会を開催した。協議の結果、本年度の事業計画を次のように構想した。

1 平成16年度役員

部長 飯塚 雅廣(河・第二中)
副部長 久保 徹(宇・城山中)
〃 渡邊 幸雄(塩・泉中)

2 今年度の会報発行構想

- (1) 発行回数は年2回とする
・第101号、第102号とする。内容はこれまでとほぼ同じ。
- (2) 発行予定日
・第101号 平成16年9月10日
・第102号 平成17年2月14日
- (3) 各号の主な内容について

① 第101号

- ・役員所感
- ・退任にあたって
- ・関プロ中学校長会研究協議会埼玉大会報告
- ・各専門部の活動計画
- ・新任校長の一言
- ・私の朝会訓話

② 第102号

- ・役員所感
- ・全日中校長会研究協議会兵庫大会報告
- ・研究学校の発表概要
- ・各専門部の活動報告
- ・海外研修視察記

◆ 進路対策部

部長 大橋 哲夫(栃・東陽中)

平成16年4月20日(火)栃木県教育会館において顔合わせの部会を開き本年度の組織及び事業計画について協議し、次のように決定した。

1 平成16年度役員

部長 大橋 哲夫(栃・東陽中)
副部長 小林 久夫(那・帯根中)
〃 影山 房興(河・明治中)

2 本年度の事業計画

研究テーマ「中学校進路指導の適正な推進と高校入試等改善への提言」

(1) 第1回研修会

- ア 期日 平成16年7月13日(火)
イ 場所 栃木県教育会館小会議室
ウ 内容
・今年度の事業計画確認
・私立中高連合会(公立学校)との情報交換会報告
・県立高校、私立高校入試改善要望事項の

とりまとめ方について

- ・その他(進路情報交換)

(2) 第2回研修会

- ア 期日 平成16年10月18日(月)
イ 場所 栃木県教育会館和室
ウ 内容
・県立、私立高校入試に関するアンケート調査結果を検討し要望事項としてまとめる。
・県立高校、県教委との懇談会の運営について
・その他(進路情報交換)

(3) 第3回研修会

- ア 期日 平成16年11月15日(月)
イ 場所 栃木県教育会館小会議室
ウ 内容
・県立高校、県教委との懇談会(アンケート調査結果に基づいた要望をする。その他情報交換)
・要望活動のまとめをする。

◆ 生徒指導部

部長 松本 敏夫(足・毛野中)

平成16年4月20日(火)栃木県教育会館において第1回部会を開催し、本年度の組織及び事業計画について協議した。

その結果、ほぼこれまでの事業内容を継続することになり、概ね次のように決定した。

1 役員

部長 松本 敏夫(足・毛野中)
副部長 伊藤 悟(塩・喜連川中)
〃 赤城 秀明(宇・鬼怒中)

2 研修計画

- (1) 平成16年度研修課題
・いじめ、不登校、暴力行為など、今日的な課題への適切な生徒指導体制の確立
・性に関する指導、薬物乱用防止教育の一層の推進
・インターネット、携帯電話に係わる生徒指導上の諸問題とその対応について
- (2) 第2回部会研修会
ア 期日 平成16年10月18日(月)
イ 場所 栃木県教育会館
- (3) 研究の方向
研究課題について、各校で取り組んでいる研究実践を発表し合い、課題解決に役立てる。

主な話し合い事例として次のようなものが考えられる。

- ・課題解決のための校内指導体制または地域との連携の具体例
 - ・各種専門機関との連携
 - ・「スクールカウンセラー」または「心の教室相談員」等との連携
 - ・生徒指導に関する特色ある教育活動の実践事例
- (4) その他
- ・平成17年度版「生徒手帳」の編集

◆ 修学旅行部

部長 後藤 明 (宇・豊郷中)

- 1 役員
- 部長 後藤 明 (宇・豊郷中)
- 副部長 久野 信弘 (芳・逆川中)
- 〃 鈴木 善雄 (下・壬生中)
- 運営委員 越井 文夫 (河・田原中)
- 研究委員 大根田 民夫 (上・小林中)
- 2 事業計画
- 4月20日 第1回県修学旅行部会 (教育会館)
役員選出、事業計画、関東修学旅行委員会役員選出
- 6月3日 関東修学旅行委員会総会並びに第1回研究協議会 (東京)
- 6月22日 第2回県修学旅行部会 (教育会館)
列車申込み、実施報告の打合せ
- 7月15日 平成18年度修学旅行輸送申込み及び修学旅行実施状況報告書の取りまとめ
- 9月30日 第2回研究協議会 (東京)
研究協議及び輸送計画調整
- 10月4日 茨城県との輸送計画調整会議 (ホテルニューイタヤ)
- 10月22日 第3回研究協議会 (東京)
研究協議及び輸送計画決定
- 11月5日 第40回関東地区公立中学校修学旅行研究発表会 (ホテルレイクビュー水戸)
- 11月30日 「平成18年度修学旅行新幹線輸送計画書」配布
- 2月10日 役員代表者会議 (東京)
- 2月25日 第4回研究協議会 (東京)
新年度事業計画案協議

〔新任校長の一言〕

栗山村立川俣小中学校長 佐藤 一成

奥鬼怒の小さな村の小中学校に赴任した私は、今まで勤務した地域や学校との違いに面食らうばかりでした。

4月、切り立った崖の間を走る道路を走り、いくつかのトンネルを抜けて、私の住む今市から1時間ちょっと運転して、川俣小中学校に着きました。

川俣湖の斜面の一番高いところに学校があり、学校の敷地の中に、泉源があります。私の赴任した4月には雪がかなり残っており、雪崩が起きないかと心配しました。学校の裏山には学校専用のスキー場があり、リフトも完備しているのでビックリしました。

児童・生徒数は、小学校11名、中学校9名の計20名。入学してきた小学校1年生は2名で、何とも家庭的な入学式にビックリしました。

6月に、2,030mの鬼怒沼登山をしましたが、小学1年生から中学3年生まで全員がほとんど誰の手も借りず、むしろ先生を助けながら切り切ってしまうたくましさにはビックリしました。

7月、牛頭天王祭に参加しましたが、若衆が中心となり、昔ながらに1時間以上の獅子舞を演じるなど地域の行事を通じた地域の結束の堅さを見たとき、今まで触れてきた地域文化や教育に対する考え方を一変させられました。

私は、校長として、教育の原点に立ち戻り、「教育とは何か」を考え直すのに良い機会に恵まれたと感じています。

川俣小中学校で、これまでの教育観を元に、どんな方針を出しても空回りするような気がしています。私は、機会を見つけては、地域に出かけ、村の人と語り、時間を見つけては、山や川に出かけて行き、木や草、虫や動物との出会いに心がけています。本校の児童・生徒とも学校ばかりでなく、地域での生活の様子や地域での役割なども児童・生徒と関わりながら眺めるように心がけています。

「学校と家庭・地域との連携」や「特色ある学校づくり」がさげばれていますが、本校の行事の多くは地域と共に作られています。学校と地域がしっかりと結びついています。

私は、「地域に根ざす川俣小中学校づくり」を経営の中心にして、地域の文化や自然環境などを取り入れた学校づくりをすすめていきたいと思っています。

茂木町立逆川中学校長 久野 信弘

まだ担任をしていた20年ほど前に、先輩から、「次の立場」を考えながら仕事をするように言われたことがある。『担任は学年主任、学年主任は教務主任、教務主任は教頭、教頭は校長』になったら』ということである。しかし、どの場面でも新しい立場に立ったときは、予想以上に困難さがあり、想像と現実の違いをその都度感じたものだった。しかし、現在、校長になり4ヶ月が過ぎたわけであるが、今までとは全く違った責任の重さを痛感している。そして、孤独感を味わっている。校長という立場は、正に別格である。

今、教育に関する環境はかつてないほど大きく変わろうとしている。「教育基本法の改正問題」「教育委員会のあり方」「特別支援教育」「食育」「人事評価システム」「学校評議員」「2学期制」等考えていかなければならないことを挙げたらきりが無い。数年前には、考えもしなかったり、言葉そのものが存在しなかったものさえある。その他、「市町村合併に伴う問題」「学校統合問題」も念頭に置かなければいけない情勢である。また、子供たちを取り巻く環境、保護者の考え方・価値観の多様化の中、学校経営もそれらに対応しながら、預かった子供たちをどう育てていくかが、私たちに与えられた大きな課題である。

過日、「親が変われば子どもも変わる」の著者、長田百合子さんの講演を聞いた。今、テレビ等で紹介され、「不登校、ひきこもり」に挑戦している話題の人である。彼女の講演の中で、印象的なことがいくつかあった。挙げてみると、「カウンセラーや精神科に相談に行ける子はまだ良い、日本国中には、外にでない(家から)子がたくさんいる。この子供たちをなんとかする人がいない」「今の親は、我が子を一人歩きをさせる勇気を持たず、我が子を間違っていると叱るような人がいたなら、それが誰であろうと、即座に撃退しようとする。また、周囲と協調するように教えるのではなく、我が子に合わせて協調してほしいと、相手かまわず要求するような親が増えている」「今の教育の世界に『医学』と『法律』が土足で踏み込んできて、教師と親がいっぺんに子どもの教育に恐れをなしてしまった」等々である。

このような時代だからこそ、我々教職にある者は、子どもたちのために労苦をいとわず尽力しなければいけないことを再認識したところである。

— 伝統を力に —

壬生町立南犬飼中学校長 五月女 次良

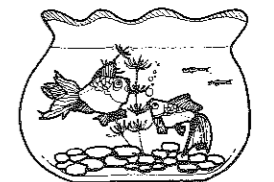
昭和22年の開校から57年、隣接する大学病院や新興住宅地の造成による生徒数の増加などに伴う校庭・校舎の改築から20年、旧校舎の面影は敷地の立木にだけ見られるだけとなりましたが、素晴らしい学習環境が整備されました。

現在、生徒数520名、北部の純農村地域と南部の住宅地域を学区とし、ここ数年は生徒数の減少が目立つようになりましたが、町村合併前の名前をそのままに現在に至っています。

壬生町は教職員生活32年目にして自分自身にとっても初めての赴任地であり、ましてや新任校長ということになると、新採教員当時以上に不安と緊張した日々のスタートとなりましたが、そんな私の気持ちを一掃してくれたのが、「伝統の力」です。校内のいたる所に残る先人が残した「栄光の記録」そしてそれを創り上げたのは現在のPTA会員の方々でした。「栃木県に南犬飼中あり」と言われるほど、生徒たちの活躍がありました。また、PTA役員会では学校を思う温かい心が「熱い言葉」として返ってきます。「地域に開かれた学校」「地域に生きる学校」「地域と共に生徒を育てる学校」という今日の課題は本校においてはすでに実践され、「輝かしい歴史と伝統」として残っているのです。

現在は生徒たちの地域におけるボランティア活動なども数多く行われ、内容の充実を課題に生徒会役員を中心に活躍しています。地域に感謝の心を持ち、地域の一員として活動する生徒たちの姿は、今日の南犬飼中を築いてきた先人あってのことと思っています。

新人校長は無力です。しかし、この大きな「伝統の力」を支えに更に新たな南犬飼中学校を目指し、生徒・保護者・地域の方々々と力を合わせ、前進していこうという気持ちで日々汗を流していきたいと思っています。



—新任校長として—

小山市立豊田中学校長 佐藤 哲 通

新任校長として歴史と伝統ある豊田中学校へ赴任し、まもなく一学期が終わろうとしています。

前校長先生より引き継いだ教育計画に沿って、なんとか年度初めの忙しい時期を乗り切ることができました。この学区は全く初めての勤務ですから不安もありましたが、いつも生徒を中心に据えて明るく元気に励む仲の良い職員と、地元の学校としていつも温かい目を向けてくれる保護者や地域の方々に見守られ、私なりに微力ですが頑張ろうと意を決しているところです。

しかし、新米校長ともなるとスタートはどうしても気負いがちで、簡単なあいさつ一つが苦勞に思えたり、今まで何でもなかった判断にも必要以上に時間がかかったりと自分勝手な反省しきりでした。それに、何といっても生徒が遠い。近くへ行ってもどんどん遠くなっていく気がして、これからこの職場で自分がどう考えどの力をどう出して行けばいいのかまだ迷いがちでもあります。

子どもの性格や言動が家庭や地域の環境に大きく左右されると同じように、私たち教員も辿ってきた道程のでき事やいろいろな人との出会い等によって教育に対する思想も自然に形成されてくるような気がします。その点から自分を振り返ってみると事の善悪とは別に「大いに偏っている」ことに気づかされます。

したがって、これから校長として大事な局面に臨んだ場合には客観的・常識的な思考判断を極力心がけなくてはならないと心していますが、しかし、やはりその上に立って自分としては、今まで緊張感溢れる現場で長い間培った「大いに偏った部分」も大切にしていきたいと考えております。

そして、背伸びをせず己の器量をわきまえながら事にあたるとともに、やがてまた時流に乗った最高の教育課程が出現しても、それを自分なりに十分に吟味し、振り回されることなく、地に足を着けて必要なことを実行して行こうと決めています。

いつも笑顔が絶えない学校で、子どもたちが持つ力と個性を十分に発揮しながら、将来に向かっての力をしっかり蓄えることができるよう全職員で頑張りたいと思います。

先輩の校長先生方には、今後ともよろしくご指導ご鞭撻の程お願い申し上げます。

〔私の朝会訓話〕

藤岡町立藤岡第二中学校長 落 合 一 夫

過日、下野新聞に志賀かう子さんの「季節の美伝える努力を」というエッセイが掲載されていた。その中で、『暮らしがことごとく便利になった今、誇らしい日本の季節感や美意識は反対に薄れていっている』と憂えておられた。さらに、こんな美しい季節の贈りものや四季のさやかな移ろいを、若人や子どもたちがどれほどの感性で迎え、心身に刻んでいるだろうかと不安に思われていた。

また、私たち大人は四季を感得するすべを身につけてこられたが、この幸せを今の子どもたちに伝えていえるのだろうか。努力の上にごそ伝承は成り立つものなのだ、とも言われていた。

本校でも「豊かな心の育成」に力を入れているが、私は、志賀さんと同様な考えをベースとした取り組みをしたいと思っていた。

併せて、「日本人としての美しい心」の醸成にも力を入れている。日本人としての誇りを持ち、古来からの文化を大切にしている生徒。祖先を敬い、親や家族、友だちを大切にしている生徒。自然を愛し、美しいものに素直に感動できる生徒。このような生徒に育てたい。

幸いにも、本校は渡良瀬遊水地のすぐそばにあり田畑や平地林に囲まれた素晴らしい自然環境に恵まれている。藤岡町のキャッチフレーズも「ハートにアクセス、人と自然の出会い町」である。

しかし、このような環境の中に育つ子どもたちが自然の大切さを認識し、保全意識を持って生活しているかということ、残念ながらそうでもなさそうだ。あまりにも自然に恵まれ過ぎているため、かえってその幸せに気づけないという皮肉な現象が起きているように思える。

従って、私の訓話は主に上記のような観点からの内容が多い。「みんなで美しい日本を守ろう」「古くからの文化を大切にしよう」「仲間を大切にしよう」「感謝の心を忘れずに」このようなことをベースに、できるだけ分かりやすく話すように努力している。なお、1時限目の授業に絶対に食い込まないように、毎回原稿を準備して時間内で終わるようにしている。

〔編集後記〕

夏休み中も、小中高校生の事件は後を絶たない状況です。改めて、豊かな人間関係の中でのコミュニケーション能力の重要性を認識させられます。

かつて勤務した国立きぬ川学院の生徒が離任式の時の手紙の一文に、「別れることは悲しいけれど、別れて悲しいと思えるほどの先生に出会えたことを喜ぶたい。」と書いた生徒がいました。如何に生徒を取り巻く「ヒト」の環境が重要かを痛感させられました。

今回の会報第101号の発行にあたり、前会長の柿崎龍夫先生を始め、執筆下さった先生方のご協力に心から感謝申し上げます。（渡邊）